込められた思いを伝える「ながおか花火館」

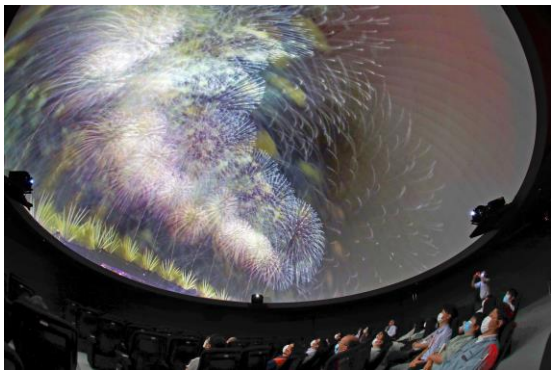
日本の夏の風物詩、花火。今年も各地で色とりどりの花を咲かせるはずだった。その花火が今夏は全国の夜空から消えてしまった。日本三大花火のひとつに数えられる新潟県長岡市の大花火大会も新型コロナウイルスの影響により、戦後初めて中止を余儀なくされた。

毎年８月２、３日の２日間にわたって開催され、国内はもとより世界から１００万人もの人が訪れる一大観光イベントとなっているが、もともとは１９４５年の長岡空襲犠牲者への慰霊として始まったものだ。２００４年に起きた中越地震の翌年から打ち上げられている復興祈願花火「フェニックス」は、視界に入り切らない迫力で「涙が出た」という人がいるほどの名物花火になっている。

花火のまちに花火が上がらない、今までにない夏になった長岡市だが、長岡花火の魅力を、１年を通じて発信する施設「ながおか花火館」がこのほどオープンした。国道８号沿いの道の駅として、花火の映像や資料の展示のほか、地元グルメや日本酒も楽しめる。中でも目玉なのが３６０度のスクリーンに囲まれたドーム型のシアターだ。長岡市出身のモデル、西山茉希さんによるナレーションとともに、フェニックスや正三尺玉３連発など３０分にわたる光と音のショーを体感することができる。現在は密を避け、入場を制限しているが、花火ロスという方はぜひ訪れてみてはいかがだろう。

災いから何度となく立ち上がってきた長岡。新しい通年観光拠点の誕生により、コロナ禍のまちにも少しずつ活気が戻りつつある。不戦の誓い、災害からの復興、いろんな思いが込められた花火に、今年は悪疫退散の願いが加わった。来年こそ、みんなで夜空を見上げるいつもの夏であってほしい。

新潟日報社　東京支社総合プロデュース担当部長　吉川英夫



圧倒的なスケールのドーム型シアター。花火の音にあわせて椅子も振動する

フードコートでは酒どころ長岡の地酒や地ビールも味わえる